

検定教科書教材を通して触れる妖精の存在

村上真理*

Awareness of Fairies through Government Authorized Textbooks

MURAKAMI Mari

Abstract

The world is globally entwined as never before and there is a need to make students understand varied cultures and know different thought processes of other countries. This paper introduces materials to broaden students' outlook on international understanding, according to the textbook contents. The main theme of the materials is fairy faith, which reflects ideas, beliefs or ways of thinking coming on the scene of everyday life in various cultures.

Key Words: international understanding, fairies

1. はじめに

筆者の勤務校では1,2年生の総合英語の指導には検定教科書を用いている。検定教科書は歴史や伝記や国際問題など様々なテーマを扱うように編纂されているが、本校で採用した教科書[1]を用いている中で気が付いたことは「妖精」の存在に触れる機会が意外に多いということであり、そのため指導に深みを持たせるには指導者にも妖精や妖精にまつわる知識が必要であった。

日本では「妖精」さらに最近の「フェアリー」には、ごく限られたイメージ、すなわちかわいさ、人間にやさしい魔力や神秘性といった点が強調されるようだ。そもそも日本人が日常生活の中で妖精の存在を意識する機会は少ないであろうと思われる。筆者が指導する対象年齢層もゲームに登場する妖精のキャラクターは別としてそれは同じであろう。しかし、何世紀にも亘って語り継がれた、妖精の存在を意識した行動や考え方はそこに生きる人々の実生活の一部である。したがってこういった他国の人々の考え方の根底にあるもの・土台となっているものや知恵を知ることが、英語教育にも求められる異文化理解ではないだろうか。そしてこういった知識や物事のとらえ方の違いを知っていることは外国人と交流し理解し合うためには不可欠な要素であると思われる。

そこで授業の中で妖精の存在を気づかせ、そこから他国の人々の考え方に意識を向けることを試みた。このような視点に立った授業は学生が英語を読むのではなく英語で読むこと、すなわち内容と真剣に向き合う姿勢にも繋がると思われる。そしてこういった学びの姿勢に導くことが異文化理解教育の一つの形であると考えている。

本稿は授業をすすめる中で、妖精が各題材ではどういった形で登場しているのか、そこでの妖精とはどういった存在であるかを考えさせたり題材を深く理解するために伝えた、妖精にまつわる知識を整理したものである。

2. 「妖精」の概念

妖精にまつわる見解は人によって千差万別であるが、特に現代の日本では妖精が存在するとは信じていない、あるいは存在するかもしれないと思わされる出来事に遭遇することさえない人がほとんどなのではないだろうか。

実際、我々が妖精に出会うのは文学作品を通じた間接的なものであり、その妖精のイメージとはおおむね「主人公やその家族の心に変化をもたらす」、「アドバイスや助けを与える」、「時には魔法を使って人間の生活に変化をもたらす」といった、作品の登場人物によいことをする存在ではないだろうか。そして人間に対して何かをするが、ストーリーによっては姿も全く現さず存在をほのめかすだけだったりする。また、どんな暮らしをしているのかは具体化されていない。そもそも主人公に働きかける役割を担

* 教養科 Division of Liberal Arts

った存在であるので、具体化して描写する必要はないのであろうし、詳細に描けばストーリーが横道に逸れることもあるのであろう。

「妖精」という語は「フェアリー」、「エルフ」という英語を当てたものであり、妖精は大きな意味でこの2つに分けられそうだ。フェアリーの語源はラテン語の「運命」、「魅惑された」という意味が含まれていることから、やはり人間の運や不運、人の運命を左右する大きな力と、また人間を惑わす不思議な力を持った存在として妖精が作品に登場するのであろう。

そしてフェアリーと聞けば花の妖精や風の妖精といった美しいものたちを思い浮かべるが、妖精には民間伝承の中に生きるものと、時代を経てその仲間に加わった、創られたものがあり、後者には大人が子供に言うことを聞かせようと考えだした「子供の部屋のボギー」と呼ばれる妖精と、創られた文学で活躍する妖精がいる。この「ボギー」とは人間に対していたずらをしたり、脅したりする危険な存在でもある妖精に与えられた名前である。そして児童文学の中に生きる妖精は、このボギーの仲間であるゴブリンやドワーフと呼ばれる妖精と、エルフという系統をひくものが多いとされ、エルフは「非常に軽やかな明るい妖精」と「何か暗い出来損ないの醜い妖精」に分けられるという。そして児童文学に登場する妖精はフェアリーより、暗い方のエルフが多いと言われる(井村, 1998 [2])。

このエルフという言葉はアングロ=サクソン時代には精霊を意味し、魔法使いから真夜中の踊り手まで全ての妖精がエルフと呼ばれていたという。歴史的に古い物語では人間と同じ大きさでしばしば恐ろしい登場人物となっているという。ところが後になってイメージは狭められ、ほとんど花のあいだで動き回るスカンディナヴィアに見られる「明るい妖精」に似たものだけを指すようになる(ブリッグズ, 1991 [3])。

こういった特性が創られていった妖精の起源と正体であるが、これはアイルランドの人々の記憶の中に生き、何世紀にも亘って語り継がれている物語から知り得ることができる。アイルランドの古文獻『アーマーの書』によれば妖精は「天に帰るほど良くもなく、地に墮ちるほど悪くもない墮天使」であり、「地上の神々」であったが崇拜もされず供え物も捧げられなくなって、人々の頭の中で次第に小さくなっていった神々だという(イエイツ, 1986 [4])。そのアイルランドの神話によれば、かつてアイルランドを支配していた一族の末裔、ダーナ女神の巨人神族であったものが、後から来たミレ族(アイルランド民族の祖先)に戦いで敗れて海の彼方逃れて「常若の国」を作り、目に見えない国はミレ族に譲り、地下に逃れて「妖精の国」を作り、

目に見えない種族「妖精」になったとされる(井村, 1998 [5])。

イギリスの妖精学者であり民族学者として名高いキャサリン・メアリー・ブリッグズ(Katharine Mary Briggs, 1898-1980)は、アイルランド民間伝承復興の中心人物であるW・B・イエイツ(William Butler Yeats, 1865-1939)による、妖精の「群れをなす妖精」と「孤独に暮らす妖精」との2分類にならい、ブリテン島に見る妖精を中心に細分化して分類している(ブリッグズ, 1991 [6])。

それによれば妖精は次のように4つに類型される。まず第1の型に家族や国家を作って人間と同じ生態で暮らす「国をなす妖精」があり、このグループをさらに3つのグループに分けている。その第1のものに「英雄妖精」がある。たいがい地下や妖精の丘といったこの世から少し離れた「妖精の国」に住む。その国の時間は人間界のそれとは速さが全く異なり、また人間のように酒盛りをしたり踊ったり歌ったり狩猟をするがその規模ははるかに素晴らしいという。2つ目に「小さな人たち」のように身体の小さな「群れをなす妖精」がいる。「英雄妖精」と同じく王と王女が国を統治し、音楽や踊りを楽しむ。きれい好きで整頓好きで心が温かいが、ある種のものには悪戯好きで盗みをしたり子供をさらうことがあるという。3つ目は少人数の家族を作って暮らす素朴で人なつこい「家庭的な妖精」で、借り物をしたり道具を直してくれたりするという。大きい分類の2番目の型に入るのは「守護妖精」で、一つの家族や家につく妖精である。これにも真面目な性質を持つものと滑稽な性質をもつものと2つに分類できるという。3番目の分類の型に入るのは「自然の妖精」で、海や河や湖水や沼に住む。親切的な性質のものもいるがほとんどは意地が悪い。また妖精の国のほかの住民との結びつきが強い。第4番目の分類の型に入るのは怪物・悪霊・巨人たちであり、幽霊や滅びた種族として描かれるが、もともとは自然の精霊であるという。この中には魔女や魔法使いも含まれるが人間から生まれたものではない。怪物たちとつながりが深いものもあり、またスコットランドでは妖精と深いつながりを持つ、ある程度人間の血を引くと思われる魔女もいるという。

3. 題材に見る妖精

前節でみた分類や神話から掴める妖精の性質は、作品の中で出会う妖精の特性を想像して深く読むうえで有益な知識であると考えられる。そしてそれぞれ特性を持つ妖精が世界各国の物語や神話に登場し、精神世界を結び付ける役割を果たしているということの気づきが、不思議な事や新しいことに妖精の働きを想い、驚きをもちつつ受け入れる感受性をもたらし、我々の心を豊かに広げるものである

うことを覚えておきたい。ここからはこのような視点を持って教科書教材に見る妖精のエピソードの紹介やそこで筆者の振り返りを記す。

3.1 English Communication I, Lesson 8

「Rose O'Neil—The creator of the Kewpies」

これはローマ神話にあるキューピッドという恋愛の神をヒントにキューピーを産んだ、ローズ・オニール(Rose O'Neil, 1874-1944)という挿絵画家の人生を描いたものである。近年では数々の日本生まれのキャラクターが人気を博して、それはまたひとつの文化や芸術とまで認知されている。この課の指導のねらいは世界で人気を博すキューピーというキャラクターの起源や歴史的背景を知り、オニールがキューピーの物語の中で人種差別の問題を扱ったり、キューピーが投票権などの女性の権利運動でのポスターに起用されるようになるといったことを知ることから、ローズ・オニールという女性の生き方への理解を深めるものである。

さて、はじめて雑誌に登場したキューピーは貧しい少女にクリスマスに贈り物を届けるキャラクターであり、後に愛のみをもたらす存在へと変化していくのであるが、キューピーとはいったい何であるか。ローズ・オニールの著書『キューピー村物語』の第8話「キューピー様のご先祖は、だあれ?」で、秘密の花園に着いたキューピーたちが優美な妖精の女王に出会う。この中でキューピーの先祖が次のように記されている。

優美な妖精の女王さま。青い瞳。バラ色の頬。亜麻色の髪ふくよかな体にまとった薄絹はゆらゆらと光り輝き、水色の翼は露できらめいています。なによりそこにただよう雰囲気が豪華で、キューピーたちもうっとりです。妖精もうれしそうにキューピーの小さい翼をさして、こう言うのでした。「あなたたちのそれ、私と一緒にね」キューピーたちは、はにかみながら、こくりとうなづきました。この妖精、じつはキューピーたちの従姉妹だったのです。ピンときた教授が家系図を調べると妖精とキューピーたちのおじいちゃんと同じ。

[1]

このようにキューピーは妖精として誕生しているとある。教科書題材としては当時の社会を変えたいとする願いがキューピーの持つキャラクターに託されていたということが強調されるのであるが、そこにはローズ・オニールの妖精の力に対する信仰と、それに答える妖精の力を感じさせられる。そしてさらに当時の人々の行動の土台にあ

る、現代に生きる我々が想像しない発想、ここでは妖精信仰であるが、これに異文化理解への視野を広げることが期待された。

3.2 English Communication I, Reading 2

『The Borrowers』

これはイギリスの作家、メアリー・ノートン(Mary Norton, 1903-1992)の代表作として知られるファンタジー小説である。『The Borrowers』には続編が4編あるが、ここで採用されているのは5冊シリーズの第1巻であり、日本でも『床下の小人たち』というタイトルで読み継がれている。物語はケイトという女の子がメイおばさんから伝聞する形で「借り暮らし」という小人の話が展開される。全シリーズを通したあらすじは「借り暮らし」の小人、クロック一家の娘アリエッティが父ポッド、母ホミリーとともに古い人家の床下で安全に暮らしていたが、父母以外の「借り暮らし」をする小人と出会ったことのないアリエッティは錠を破って人間の男の子と友達になる。これが原因で一家は住み慣れた家を離れなければならない状況に陥り安住の地を求めて様々な土地を放浪するというものである。

この小説の題名である「borrowers」というのは魔法の力などなく、人間からいろいろなものを借りて暮らす妖精のことだという。

また、イギリス文学の特徴のひとつに妖精との密接な関係がある。イギリス伝承の民話や古謡の特徴に姿かたちも人間との距離も多種多様な妖精が登場するが、床下で借り暮らしをする小人も妖精の末裔と見なされ、ノートンの「借り暮らし」の小人もやはりイギリス民間伝承である妖精譚の系譜だといわれる(成瀬, 2009 [7])。しかしノートンの描いた小人たちは伝承の中の妖精たちと異なり、魔法とも思えるような不思議な力に頼らない。この点について日本の「妖精学」の権威である井村君江氏もノートンの描く小人について次の見解を示している。

借り暮らしの小人の物語でも、昔は人々に好んで語られ信じられていた妖精たちが、現代では生き残りも少なくなり、もはや能力も人間並みになってしまい、やっと一族だけが古い家に住んでいるということが前提になっている。従って、彼らは昔からの妖精ではなく、小型人間、「一人前の人間」であり、その行動もみな人間のミニチュア版になっている。(中略)この人間寄生的存在の小型人間である「借り暮らしの小人族」は、現代に作りだされたいわば新しい妖精の一つの典型とも言えるであろう。[2]

そこでこの小人族を冒頭の妖精の概念で挙げた分類に照らして、どの概念に当てはまるかを考えてみる。おそらく家族という限られた集団の中で生活を営む特性から「家庭的な妖精」、あるいは特定の家に住みつく「守護妖精」の範疇に収まるのではないだろうか。

このように、妖精について知識を蓄えてから作品を読ませると登場人物の行動や性質に対して想像力が働き、展開に関心が高まり、読むことに楽しさをもたらせたと感じられた。そして今も妖精が生きる文化があることを思い起こさせ、それが異文化との接触という機会を与えたように思われた。

3.3 English Communication II, Lesson 7

「The Origins of Halloween」

ここではタイトル通り、今日ではイベント化されているハロウィーンの風習の起源や意味を読み取るものとなっている。ハロウィーンが2千年も前のアイルランドの祭りに由来することが書かれ、ハロウィーンの仮装事情に古代アイルランド人の風習や信仰についての知識を得ることになり、また深く妖精に触れることになる。

はじめにハロウィーンの祭りが10月31日に催される理由と人々が仮装をするようになったいきさつが次のように書かれている。

One fun part of Halloween is that you can become someone or something else. People enjoy dressing up. [...] However, the original purpose of wearing a costume was not for fun. It was to protect the wearer from evil spirits. In fact, Halloween originated from an Irish festival two thousand years ago. To the ancient Irish, October 31st was New Year's Eve. It was the end of summer — the time of the living — and the beginning of winter — the time of the dead.

On this day, the souls of the dead were believed to appear. People were afraid of evil souls among them. To fool them, people wore costumes to look like the evil spirits. (ハロウィーンの楽しいことの一つは他の誰かまたは何かなれる事である。人々は仮装することを楽しむ。(中略)しかし衣装を着る本来の目的は楽しみのためではない。それは衣装を着た者を悪霊から守ることであった。ハロウィーンは2千年前のあるアイルランドの祭から起こった。この祭りがおこなわれる10月31日は古代アイルランドでは大みそかであり、夏の終わりであり、死者の時とされる冬が始まるで

あり、この日は死の霊が現れると信じられ、悪霊を恐れる人々は身を守るために悪霊と同化する格好をして目をくらませたのである。)

ハロウィーンの起源はケルトと呼ばれる古代アイルランドの人々の暦で11月1日の前夜の大晦日の日没から始まる夜にある。ヨーロッパのある民間の祭日では、冬を目前にしたその一年の始まりの前夜に「生まれること、生きること、死ぬこと、再生すること」のすべてを目撃できるという。これは「万霊祭」と呼ばれるケルトの祭「サウイン」である。この夜には死の世界と生の世界の壁が取り払われ、死者が蘇り、両方の時空に大交流が起こる。その最たるものが祖霊や死者たちが家々に戻ってくることであり、彼らが戸口に現われる夜のために人々は食卓に食事を用意し、共にいただくという。

そしてケルトの正月にあたる11月1日を中世ローマ・カトリック教会が「諸聖人の日」と定めてから、その前夜教会では祈祷が行われ、また公式ではないが一般には「ハロウィーン」として祝われるようになった。歴史上異教のケルトの「サウイン」とキリスト教の「ハロウィーン」という二つの祭歴がその結果、重なることになる(鶴岡,2017 [8])。

とにかくハロウィーンの夜とはすなわち、先祖そして親しい死者たちを「思い出すこと」、「もてなすこと」、「供養すること」を年に一度行う夜なのだ。

ところで、英文に妖精は出てこないが、妖精には教材を通してどのように出会うことになるのだろうか。

古代アイルランドの人々は自然現象の背後に妖精の働きがあると自然に受け止めていたという。目まぐるしく変化するアイルランドの天気も妖精の気難しさに直結すると考えていたという(村瀬,2019 [9])。

またケルトの神話には異界が登場するが、それは光り輝く楽園もあれば地獄もある不可視の国であり、神々や精霊、妖精、小妖精、不格好な巨人から構成される。彼らはサウインの前夜祭に異界への門が解放されると出現する。サウインの祭ではアイルランドと英国のドゥルイド祭司(井村,1998 [10])たちが作物や動物の犠牲を捧げ、火のまわりで踊り、太陽の季節の終わりや暗闇の季節の到来を告げる。この火は家に戻ってくる祖霊が迷わないようにとの灯火、霊魂を暖める火、死者の魂を救い悪霊をはらう「浄罪の火」でもあるが、祭司は各家庭にこの火から燃えさしを与え、かまどの火を新しくつけて家を暖めさせて、祖霊だけではなく悪い妖精や悪い精霊、魔女などまでもが入らないようにさせたという。

ヨーロッパの伝説においては妖精と死者の霊は同じものとみなされることが多く、このサウインの夜にはやはり

妖精や自然界の精霊も現れる。しかし人々は妖精をなんとかだめてあの世に帰ってもらうのが決まりであったという。それは妖精に魔法をかけられ、さらわれてしまえば二度と戻れなくなるかもしれないからであるという(ポール, 2015 [11])。

教科書では 'Trick or treat!' の風習の起源が次のように続く。

This custom of “trick or treating” is said to have developed from an old European custom called “souling.” November 1st was the day when the souls of the dead were thought to come back to earth. To honor them, people baked small round cakes called “soul cakes.” (この「お菓子をくれないといたずらをするぞ」という習慣は「死者の慰魂」とよばれる古いヨーロッパの習慣から発展したといわれる。11月1日は死者の魂が地上にも戻ってくる考えられる日であり、その魂を敬いたたえるために人々は「ソウルケーキ」という小さな丸いケーキを焼いたのだ。)

ここに登場する「soul cakes」には諸説あるが、ケルトの神話では人々は祖霊や死者たちが戸口に現われる夜に食事を用意し、その供養のごちそうの象徴として焼いたお菓子のことである。一年の収穫の貴重な小麦粉を祖先や親しい死者の供養のために焼くので「霊魂のお菓子(ソウル・ケーキ)」と呼ばれる。そして「トリック・オア・トリート」とは供養の「トリートメント(もてなし)」を求めて訪れる祖先や親しい死者たちの願いを子供たちが代理して放つ言葉であり、死者と生者をつなぐ深いメッセージが込められているという。またヨーロッパの歴史文化の思想においては、ソウル・ケーキを手渡す時には死者や祖霊に交じた、人を惑わすいたずらをする妖精に出会う(鶴岡, 2017 [12])。

そして英文は“The “jack-o’-lantern,” Halloween’s most popular symbol, originated from an Irish folktales.” とハロウィンのシンボルと言えるカボチャの提灯「ジャックランタン」の由来となったアイルランドの民話に触れている。この民話は次のようなものである。

ジャックという名の農場主が悪魔をだまして木によじ登らせて降りてこられないようにして、自分の魂を奪われないようにさせるという取引をする。その取引のために、ジャックは死ぬと天国にも地獄にも入れずこの世をさまようことになり、道を照らすろうそくを悪魔に与えられると、ジャックはカブをくりぬいて、ろうそくをそこに据えるというものである。

イングランド東部地方の沼地には鬼火が現われるが、こ

の鬼火がもとはスティンギー・ジャックという農民で、悪魔と地獄に行かないとの契約をしていたジャックは、生前の行いが悪かったために天国に行けず、自分の居場所を探すためにカブに似た野菜のランタンに憑依してこの世をさまようのだという。このランタンは19世紀にはブリテン島やアイルランドでのハロウィーンの祭りに登場したようだが、これがアイルランド人、スコットランド人の移民がアメリカにハロウィーンの祭りを持ちこんだ際にカボチャを用いるようになり、現代のハロウィンにはなくてはならないかぼちゃのお化け、カボチャをくりぬいて内側にキャンドルを灯すランタン、ジャック・オー・ランタン(ランタン男)となったという。

そして妖精とのつながりはケルトの神話の中のウィル・オ・ザ・ウィスプという旅人を惑わせる鬼火に見ることが出来る。鬼火の起源は生前の行いのために天国にも地獄にも行けなくなった人間の魂や死んだ子供の霊とも言われ、夜にランタンの灯りで旅人を沼や湿地に誘い込んで道に迷わせ、嘲笑を浴びせて恐怖させたり命を奪ったりするという。この彷徨える死者の鬼火は「霊魂の光」、「霊の行く道を照らす灯」、そして今日世界中に広まったランタンとなる。この旅人を道に迷わせるという性質から、同様のいたずらをする妖精と同一視されている(村瀬, 2014 [13])。イングランドでは今でもジャック・ア・ランタンとは夜の沼地に出没する、その輝く炎で旅人を惑わせる湿原の妖精だと認識されている(ジョンソン, 2010 [14])。

最近では若者や子育て世代の間に定着してきたハロウィーンの祭りだが、その起源である古代アイルランドやヨーロッパの歴史文化を伝えるなかで異なる文化に目を向けさせられたように思われる。またそこに既習の課にて知識を得た妖精の存在の気づきと人々の中での彼らの存在意義を考えさせることでいっそう異文化に対する関心が高まることを期待できた。

3.4 English Communication II, Reading 1

『The Velveteen Rabbit』

これはマージェリィ・W・ビアンコ(Margery Williams Bianco, 1881-1944)の英米では世代を超えて読み継がれている名作である。ただのキレでできているビロードのうさぎは、自分たちは本物だと自慢する機械仕掛けのおもちゃたちにバカにされるが、心から大切に思われたおもちゃは、本物になれるということを信じ、そして確かに、ぼうやに可愛がられていたビロードのうさぎは、ぼうやにとつての「本物のうさぎ」となったと感ずることができた。しかし突然の別れがくる。ここに妖精が登場する。悲しむうさぎの涙が頬を伝って落ちた地面に、一輪の花が咲き、その中

から現れた妖精がうさぎを本物のうさぎに変えるのである。この妖精は子どもの可愛がったおもちゃを守る妖精とされ、おもちゃが古くなり、必要が無くなると森へ連れていき、森の仲間に変える、だれから見ても本物にするという働きをする。

題材としての狙いは「本物とは何だろう、うさぎにとって一番の幸せは何だったのだろう」といったことを考えさせるところにあると思われるが、ここでは、文学で活躍する妖精と、悲しい出来事に遭遇した時に妖精が現れることや妖精の働きに状況の回復を託すという発想に注意を促した。例えば『シンデレラ』に登場する妖精の代母のように人生の重大な場面に現われて人間を守り、幸運を受ける働きを思い起こさせる。この『シンデレラ』に登場する親切な代母は妖精物語においては「フェアリー・ゴッドマザー」と呼ばれる、赤子の誕生を司り、幸運を授けたり守護の役目をする妖精である(井村, 1998 [15])。また冒頭で述べたエルフの系統であるというが、おそらく児童文学には少数派の「非常に軽やかな明るい妖精」の系統に属すると想像させる。そして『The Velveteen Rabbit』の妖精も常におもちゃを守り、幸運を授ける。この特性からこの妖精も先の分類では「守護妖精」と見なされようかと考えさせるのである。そして、やはり妖精の概念を語る中で触れた、狭められたエルフの特性、すなわち花のあいだで動き回るという特性が『The Velveteen Rabbit』の妖精に反映されていると想像させるのも興味深いものであった。さらには、妖精は時にはさまざまな贈り物を与え、それは力であったり、また特殊な才能であったり、その与え方もそれぞれであるが、とにかく妖精が困難な状況から救いだすという発想は我々の文化が持ち合わせていないものである。こういった気づきもまた他文化との接触と言えよう。

4. おわりに

冒頭で述べたように、妖精にはかわいさや神秘性や人間にもたらす優しい魔力が強調される傾向があるが、英語の授業を通じて、妖精はそれだけの存在ではないし、形態も様々であることを示し、そこから今も身の回りで彼らがまだ生きているかも知れないことを想像させたり、妖精が存在する土地・自然との結びつきや現代文化と異界との関わりを示してきた。その目的は妖精の存在を切り口にして、妖精が今も息づく、あるいは妖精を受け入れてきた文化を生きる人々の発想や物事の捉え方に意識を向けるように導くことであった。こういった学びや思考を促すことは一つの事象にも国や民族などによっていろいろな視点があることに気付かせることであり、このような学びの姿勢を培うことが英語の授業を通じて実践できる異文化理解あ

るいは国際理解教育のひとつの形であると考えている。

引用文献

- [1] ローズ・オニール：キューピー村物語, 117, クレスト社, (1997)
- [2] 井村君江：ケルトの妖精学, 343, 講談社学術文庫, (1996)

参考文献

- [1] WORLD TREK English Communication I, II, 桐原書店, (2014)
- [2] 井村君江：妖精の国の扉, 29-31, 大和書房, (1998)
- [3] キャサリン・ブリッグズ：妖精の国の住民, 73, 筑摩書房, (1991)
- [4] W・B・イエイツ：ケルト妖精物語, 25, 筑摩書房, (1986)
- [5] 井村君江：妖精の国の扉, 17, 大和書房, (1998)
- [6] キャサリン・ブリッグズ：妖精の国の住民, 17-20, 筑摩書房, (1991)
- [7] 成瀬俊一編：英米児童文学のベストセラー40, 38-39. ミネルヴァ書房, (2009). また「妖精」が fairy の訳語となるのは昭和初期のこととある。
- [8] 鶴岡真弓：ケルト再生の思想, 7-8, 筑摩書房, (2017)
- [9] 村瀬繚：「ケルト神話」がわかる辞典, 113, SBクリエイティブ株式会社, (2014)
- [10] ドゥルイド祭司というのは、ケルト神話の中で王の助言者として王座の隣に座を占めて予言を行いオークの杖で魔術をおこして活躍する僧たちで、ケルトの社会に2種ある階層に属して王権に匹敵あるいは王権をも支配する存在である。またこのオークの木は神木であり至高の神の象徴とされる。ドゥルイドの意味には「ドゥル」は「オーク」の意味を表し、イドは「知識」で併せて「オークの木の賢者」、あるいはドルは「多い」、イドは「知る」で「多くを知る」などの説がある。(井村君江：妖精学入門, 23-24, 講談社, (1998))
- [11] マリオン・ポール：マイ・ヴィンテージ・ハロウィン, 16,98, グラフィック社, (2015)
- [12] 鶴岡真弓：ケルト再生の思想, 22-23, 筑摩書房, (2017)
- [13] 村瀬繚：「ケルト神話」がわかる辞典, 141, SBクリエイティブ株式会社, (2014)
- [14] ポール・ジョンソン：リトル・ピープル, 58, 創元社, (2010)
- [15] 井村君江：妖精学入門, 89, 講談社, (1998)